

## 自閉症スペクトラム児の母親における 子どもの社会的自立に向けての体験プロセス

西村 智恵子 高野 久美子

### 1 はじめに

平成28年に発達障害者支援法が改正され、就学前から就学中、そして就学後に渡った切れ目のない支援を行うことの重要性が示された。また、学校における個別の教育支援計画及び個別の指導計画の作成の推進が明記され、さらに、国・都道府県による就労の定着支援や市町村における地域での生活支援の強化、発達障害者の家族等への支援についても改正が行われた。これらの改正により、医療・保健・福祉・教育・労働等に関する業務を行う関係機関及び民間団体相互の連携の更なる強化が図られ、発達障害児・者に対する支援のより一層の充実が期待されることとなった。

また、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（中央教育審議会，2011）では、特別支援学校高等部におけるキャリア教育・職業教育の充実と題して「個々の障害の状態に応じたきめ細かい指導・支援の下で、適切なキャリア教育を行うことが重要である」（p.60）と明記されている。また、同答申では、キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」（p.16）であると記されている。このような背景の中、特別支援学校小学部・中学部・高等部のそれぞれにおいて学習指導要領をもとに社会的・職業的自立に向けてのきめ細かなキャリア教育・職業教育が行われている。しかし、令和3年度版障害者白書（内閣府，2021）によると、「障害のある人が、生涯にわたって自立し社会参加していくためには、企業等への就労を支援し、職業的な自立を果たすことが重要である。しかしながら、2020年5月1日現在、特別支援学校高等部卒業者の進路を見ると、福祉施設等入所者の割合が約60.7%に達する一方で、就職者の割合は約23.4%となっており、職業自立を図る上で厳しい状況が続いている」（p.66）と示されている。その中でも、自閉症スペクトラム（Autism Spectrum Disorder：ASD）児・者の就労に関しては、その特性から課題が多いことが指摘されており（永吉，2017；梅永，2017）、家族の支援ニーズも報告されている（川田・岡田・片山・野嶋，2017；松山，2015）。特に、特別支援学校等の教育機関を卒業後は、地域の支援を自ら活用していくことが求められるため養育者の負担は大きいと考えられる。前田・荒井・井上・張・荒木・荒木・竹内（2009）ではASDのある

幼児及び学齢児の親へのアンケート調査を行った結果、子どもの将来の悩みや不安についての質問においては「本人の就職」が圧倒的に多く回答され、子どもの将来について最も期待することについての質問においては「自立した生活」が群を抜いて多かったことを報告している。また、西村・高野（2020）においても、学童期ASD児の母親の体験プロセスを検討する中で「就労に関する不安」の概念が抽出されていることから、ASD児の養育者は子の就労や自立に関して常に大きな不安を抱えていることがうかがえる。ASD児・者本人や、教育機関および相談機関における支援者についての研究は昨今多く行われつつある（川端，2019；神田・伊藤・高橋，2018；清水，2017）。しかしながら、家族、とりわけ養育者へのサポートに関する研究は未だ少ない現状がある。本研究では、一人のASD児の母親の高等部3年間の具体的行動を記した連絡帳の分析と中等部・高等部6年間と卒業後1年間を振り返ったインタビューの分析を行うことにより、具体的行動と内的体験プロセスを合わせてASD児の母親が子の社会的自立に向けてどのような体験プロセスを辿るのかについて立体的に捉えることを試みる。なお、本研究における社会的自立の定義については「職業経済自立を達成し、且つ、社会的規範や道徳等の倫理を身につけており、その存在が一個の人格として周りの人々から認められている状態になっていること」（慎，2008，pp.100-101）を使用することとする。

## 2 調査 I：連絡帳の分析

### （1）目的

特別支援学校高等部在学時の3年間に母親が学校に宛てて記入した連絡帳の記述を分析する。連絡帳における母親の記述を学年ごとに概観し、高等部3年間における「子の社会的自立に関する母親の体験」とその変化の様相を明らかにすることを目的とする。

特別支援学校及び特別支援学級では保護者と学校（教師）とが連携を行うために連絡帳が大きな役割を果たしている。塩見（2017）では、特別支援学校における知的障害のある児童生徒の教育における連絡帳の活用方法について2年間に渡る実践の報告を行い、連絡帳のもつ教育的意味について言及している。また、阿部ら（2018）は、小学校特別支援学級で使用している連絡帳の持つ子育て支援機能に着目して検討を行った結果、3つの子育て支援機能を抽出している。1点目は、「受容的な見方ととらえた子どもの姿に関する日常的な情報の共有が子育ての喜びと意欲を引き出すこと」（p.93）、2点目は、「保護者の連絡帳に対する継続的な受容・共感、励まし、ねぎらいが子育てにかかる心理的な安定につながること」（p.93）、3点目として、「保護者の子ども理解と支援のための、迅速で、かつ個に応じた情報提供やアドバイスができること」（p.93）とある。これらの報告から、特別支援教育における連絡帳の働

きは単なる連絡手段だけにとどまらず、多様な役割を有していることが考えられる。学校（教師）からは事務的な連絡以外に学校での様子や課題や成長について、母親からは子の特性や家庭での様子、学校への要望などについて連絡帳に記述することで学校・家庭間での様々な情報共有がなされている。

以上のことから、日々の連絡帳を分析することで母親のその時々における体験を如実に辿ることができると考えられるため、本研究の分析対象とした。

## （２） 方法

### ① 調査協力者

2014年4月～2020年3月までの6年間、特別支援学校中学部および高等部に在学していたASD児の母親1名に調査の協力を依頼した。

### ② 倫理的配慮

連絡帳の閲覧及び本論文での引用にあたっては、事前に本研究の主旨と個人情報の保護について、調査の中止を要求する権利等の説明を行い、調査協力者から同意を得た。また、創価大学の人を対象とする研究倫理委員会の承認を得た。

### ③ 手続き

本研究では、母親が高等部3年間で学校との連絡手段として活用していた連絡帳の記述の分析を通して、『子の社会的自立に関する母親の体験』の全体像を把握する。分析に際しては、KH coder ver.3を使用した。KH coderはデータを計量的に分析し、データの全体像や概観を捉えることができる計量テキスト分析ソフトである（樋口、2020）。連絡帳の母親の記述から「社会的自立」「就労」「進路」に関して母親が言及している箇所を学年ごとに抜き出した後、KH coderを使用して語の抽出を行い、それぞれの語の出現頻度や関連性を共起ネットワークとして図式化した。共起ネットワークでは同じ文章中に共起することが多かった語句を図として示すことができる。共起ネットワークの図における円の大きさは語の出現数を表し、線の種類は共起関係の強さを表す（実線は強く、破線は弱い）。なお、抽出語については、「月、昨日、記入、持つ」など出現頻度は高いが文脈上「社会的自立」「就労」「進路」との関係が薄いと考えられる語については使用しない語として予め指定しておく。

## （３） 結果

各学年における母親の「社会的自立」「就労」「進路」に関連する記述を抜き出し、表1に示す。高等部1年生では年間196日分、高等部2年生では年間193日分、高等部3年生では年間169日分の母親の記述があった。抜き出した記述は合計54箇所、それぞれ1年生9箇所、2年生18箇所、3年生27箇所になっている。また、内容で大別すると6種類に分けることができる。それぞれの数を以下に記す。（ ）の中は左から順に1年生、2年生、3年生におけるそれぞれの数を示す。

- ・家庭における進路に関する取り組み・・・8（2、4、2）
- ・学校の進路指導に対する母の気持ち・・・6（2、2、2）
- ・進路に関する学校との事務的やり取り・・・8（3、3、2）
- ・子の就労・自立に向けての準備性・・・10（2、4、4）
- ・進路に関する連絡・・・17（0、2、15）
- ・事業所に対する希望・・・5（0、3、2）

表1 連絡帳における「社会的自立」「就労」「進路」に関連する母親の記述

学年	日付	母親の記述	記述の種類
高等部 1年生	11月15日	就労施設への見学は、これから進路についての話をしていく上でいい刺激になりますね、貴重な経験をさせて頂きありがとうございます。	学校の進路指導に対する母の気持ち
	12月12日	進路のことに関しても色々と考えて下さっているようで本当にありがとうございます。	学校の進路指導に対する母の気持ち
	12月12日	ピックアップしている事業所はいくつかあるので、これから見学等連れて行こうと思います。	家庭における進路に関する取り組み
	1月22日	進路説明会の出欠確認票を持たせました。	進路に関する学校との事務的やり取り
	2月14日	進路の手引き、持参します。	進路に関する学校との事務的やり取り
	2月22日	就労の意欲にもつながりますので。	子の就労・自立に向けての準備性
	2月26日	進路希望調査を持たせました。	進路に関する学校との事務的やり取り
	3月5日	自分で考えて行動することが増えているのは自立に向けての良い傾向だと思います。	子の就労・自立に向けての準備性
	3月14日	「春休みに事業所の見学に行ってみようか〜」と話をしています。	家庭における進路に関する取り組み
	3月26日	進路に関して、また何かありましたら相談させていただきます。	進路に関する連絡
高等部 2年生	5月30日	卒業後のイメージは、まだ全然ないようですね。	子の就労・自立に向けての準備性
	5月30日	事業所説明会で、いくつか見学に行きたいところをピックアップして、夏休み中には連れて行きます。	家庭における進路に関する取り組み
	7月10日	進路の方でも、〇〇の特性を理解して伸ばしてくれる事業所を探したいと思います。	事業所に関する希望
	9月5日	B型の事業所を3カ所見学して、卒業後のことを考えるきっかけにはなつたようです。	子の就労・自立に向けての準備性
	9月21日	見学に行った事業所からパンフレットを預かりましたので〇〇先生にお渡しください。	進路に関する連絡
	10月10日	事業所見学の件、承知しました。	進路に関する学校との事務的やり取り
	10月15日	事業所見学は、「いろんな仕事をしているのが見られた」と話していました。	子の就労・自立に向けての準備性
	10月16日	進路説明会出欠票を持たせました。	進路に関する学校との事務的やり取り
	11月29日	こういう点を理解してくれる職場で、将来は働けたらいいのですが…。	事業所に関する希望
	12月13日	〇〇の将来について、真剣に考えて下さっている先生方の熱意が伝わってきて、とても嬉しかったです。	学校の進路指導に対する母の気持ち
	1月10日	進路のことは、家でも話す機会を増やしていきたいと思っています。	家庭における進路に関する取り組み
	1月11日	学校の方が先生方のおかげで順調なので。	学校の進路指導に対する母の気持ち
	1月11日	3学期は事業所見学や病院に連れて行ったりしようと考えています。	家庭における進路に関する取り組み
	1月16日	卒業後もなんとか心地よく、チャンスも与えてくれる居場所を確保してあげたいです。	事業所に関する希望
	1月17日	販売が面白いと思えたら、将来的に就職先の選択肢も増えますので。	子の就労・自立に向けての準備性
	2月8日	進路希望調査を記入して持たせました。	進路に関する学校との事務的やり取り
2月18日	金曜日、帰宅後に第1希望にしているB型事業所さんに行って〇〇を買いました。	家庭における進路に関する取り組み	
高等部 3年生	4月19日	職場で周りに合わせられないと困りますものね。	子の就労・自立に向けての準備性
	4月24日	実習に行く予定の事業所に〇〇を買いに行きました。	家庭における進路に関する取り組み
	5月16日	事業所まで徒歩で付き添ってくださいありがとうございます。	学校の進路指導に対する母の気持ち
	5月17日	校内実習見学会と事業所説明会の申込書を持たせました。	進路に関する学校との事務的やり取り
	6月17日	卒業後すぐにB型事業所を利用するつもりです。	進路に関する連絡
	6月17日	区役所での手続き等が必要でしたら、お早めにご連絡いただけますと助かります。	進路に関する連絡
	6月21日	アセスメント実習を希望します。	進路に関する連絡
	6月25日	アセスメント実習ですが、見学に行ったことがある事業所がいいと本人が言うので〇〇事業所さんをお願いしたいと思います。	進路に関する連絡
	7月2日	アセスメント実習のプリント受け取りましたので、今日にでも手続きをします。	進路に関する連絡
	7月8日	進路希望調査を記入して持たせました。	進路に関する学校との事務的やり取り
	7月9日	アセスメント実習の手続きのため12日の午後に区役所の方が来られます。	進路に関する連絡
	7月22日	アセスメント実習の件、今とどこ何の連絡もないので少し心配しております。	進路に関する連絡
	7月23日	〇〇事業所さんに電話をして、30日に面接することになりました。	進路に関する連絡
	8月30日	〇〇事業所でのアセスメント実習、無事に終了しました。	進路に関する連絡
	9月2日	アセスメント実習では名刺を作成して、受け渡しの練習もしたそうです。	進路に関する連絡
	9月27日	〇〇な事業所さんなので、〇〇の今後の課題が見つけれられ、また〇〇の違う一面を引き出してくれたりすることを期待したいと思います。	事業所に関する希望
	10月1日	学校の方でも、しっかり現場実習に向けての準備をして下さっているようで安心しました。	学校の進路指導に対する母の気持ち
	10月11日	「仕事をする」というイメージがあやふやなので、今後役に立つと思います。	子の就労・自立に向けての準備性
	10月15日	不向きな可能性もあるかなと思いつつ現場実習に行かせましたが、ちゃんとお応じていたので、よく頑張ったと思います。	子の就労・自立に向けての準備性
	10月15日	昨日は、案内状が届いたのでアセスメント実習でお世話になった〇〇事業所で見学・体験をさせていただきます。	家庭における進路に関する取り組み
	11月18日	進路の件、よろしくお願ひします。	進路に関する連絡
	12月11日	進路の件、よろしくお願ひします。	進路に関する連絡
12月12日	区役所からは、アセスメント実習と4月からの利用は別なので再度訪問調査を受けるように言われています。	進路に関する連絡	
12月18日	〇〇事業所さんに寄ったところ、「区役所で書類をもらってきてあげますよ」と言ってください、昨日記入できました。	進路に関する連絡	
12月18日	4月から〇〇が来るのを、他の利用者さんも楽しみにしてくれているそうです。	進路に関する連絡	
1月22日	社会人になるにあたって、人権について知ることが大事ですね。	子の就労・自立に向けての準備性	
2月21日	進路先でも、構ってくれる人がいたらいいなあ〜と思います。	事業所に関する希望	

次に、母親の「社会的自立」「就労」「進路」に関連する記述をKH coderを使用して計量的に分析した結果を示す。

高等部1年生時の母親の記述において分析対象となる9文について共起ネットワーク分析した結果を図1で示す。頻出語は7個抽出され、サブグラフ検出(modularity)の結果、1つのグループが確認された。〈事業所〉と〈見学〉の共起関係が最も強く表れている。その他、〈進路〉の出現頻度が最も高い。

次に、高等部2年生時の母の記述において分析対象となる18文について共起ネットワーク分析した結果を図2で示す。頻出語は16個抽出され、サブグラフ検出(modularity)の結果、〈見学〉〈事業所〉〈連れる〉〈説明〉のグループ、〈理解〉〈思う〉〈話す〉〈仕事〉〈進路〉のグループ、〈B型〉〈行く〉〈希望〉のグループの3グループが示された。その他の出現語句として〈将来〉や〈卒業〉といった語句が見られる。

最後に、高等部3年生時の母親の記述において分析対象となる27文について共起ネットワーク分析した結果を図3で示す。頻出語は12個抽出され、サブグラフ検出(modularity)の結果、〈現場〉〈実習〉〈行く〉のグループ、〈事業所〉〈見学〉のグループ、〈アセスメント実習〉〈区役所〉〈連絡〉〈手続き〉のグループの3グループが示された。その他の語句として〈進路〉〈希望〉〈今後〉といった語句が見られる。

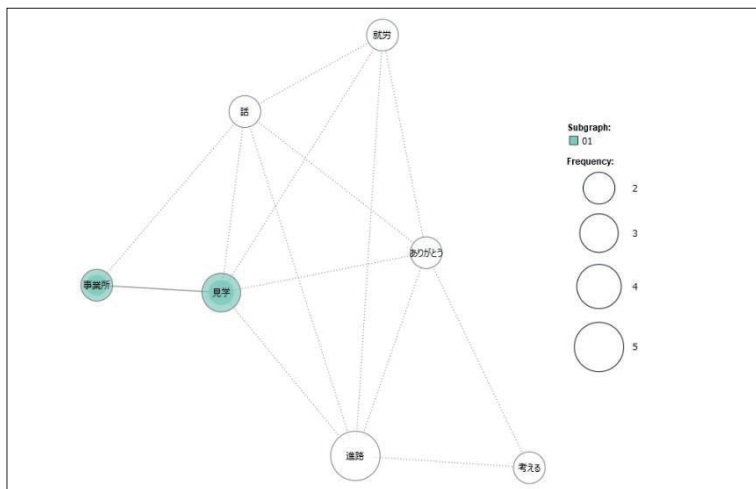


図1 高等部1年生時の連絡帳における母親の記述（共起ネットワーク）

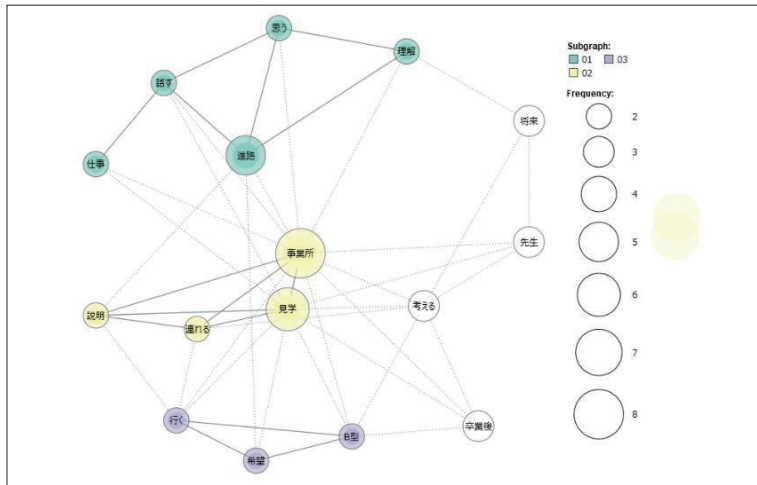


図2 高等部2年生時の連絡帳における母親の記述（共起ネットワーク）

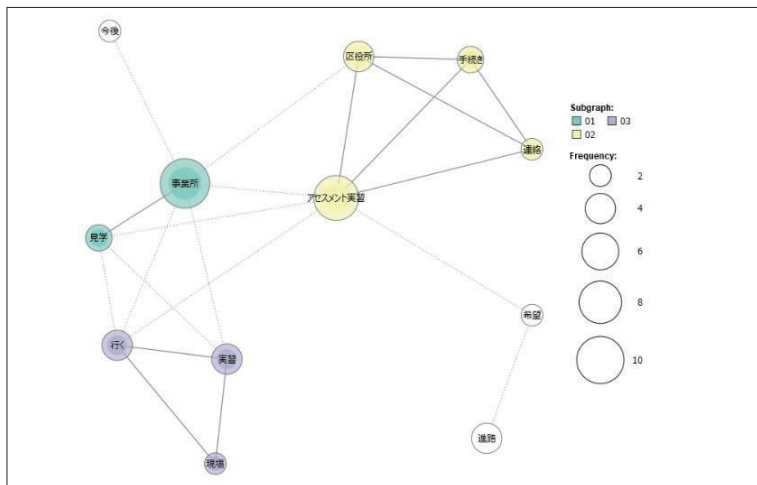


図3 高等部3年生時の連絡帳における母親の記述（共起ネットワーク）

#### (4) まとめ

高等部の各学年における共起ネットワークをもとに母親の「子の社会的自立に関する体験」の特徴を記し、高等部3年間の概観を述べる。

高等部1年生では、「社会的自立」「就労」「進路」に関する記述が全体的に少なく、〈事業所〉〈見学〉の関連が高いことが示された。母親は卒業後の進路を考えていくにあたり、まずは実際に進路選択に“動き出す”段階である事業所見学を体験すると考えられる。

高等部2年生では、1年生と比較して「社会的自立」「就労」「進路」に関する記述が増大することから、子の卒業後の進路に関する学校に向けての連絡や相談が多くなされていることがうかがえる。そして、〈進路〉〈仕事〉〈話す〉の語句同士における関連が高いことから、2年生では、母親が子に進路や就労について話をするなど、進路についての考えを“深める”段階を体験すると考えられる。また、〈B型〉という語の出現から、2年生の時点で具体的に就労継続支援B型といった事業所の種別も視野に入れ、子の社会的自立に向けて行動していると考えられる。さらに、〈理解〉と〈事業所〉の共起関係から、子の特性を理解してくれる事業所を望んでいることが示唆された。

高等部3年生では、実際の手続きに関する記述が出現するため、〈区役所〉〈手続き〉といった語句や就労継続支援B型事業所の手続きに必要な〈アセスメント実習〉といった語句が新たに出現する。1、2年生では、事業所見学や進路に関する話をするなど、子に就労の意識を持たせるための行動が主であったが、3年生になると具体的に行政や事業所とやり取りを行うなど“実行する”体験が増えることが示された。

以上のように、ASD児の母親は、高等部1年生では、『子の社会的自立に関する体験』の第1段階として事業所への見学を意識し始めることが分かった。続いて2年生では、子の卒業後についての意識が高まり、実際に事業所への見学を行うために子に合った事業所の種別を決定したり、同時に子の就労への意識づけを行ったりといった段階を踏む。そして、3年生では卒業後に通う事業所を選ぶなど、卒業後の進路を決定し、具体的な手続きを行っていく段階を体験することが明らかになった。また、〈事業所〉と〈見学〉については3年間を通じて共起関係が強く示されていることから、“事業所を見学する”という実際に自分の目で確かめるという姿勢は高等部における母親の『子の社会的自立に関する体験』の中でも一貫して維持されていることが確認された。

### 3 調査Ⅱ：インタビュー調査

#### (1) 目的

特別支援学校では児童生徒の社会的・職業的自立に向け、「職業」の授業や校内実習・現場実習などを通して丁寧な支援が行われており、児童生徒及びその養育者は、それらの学校における取り組みを基に、卒業後の進路決定や就労への準備を行っていくことになる。

本研究では、特別支援学校に在学しているASD児の母親に子の特別支援学校の中学部入学から高等部卒業までの6年間及び卒業後に事業所に通った1年間（合計7年間）についてインタビューを行い、ASD児の母親における子の社会的自立に向けての体験プロセスを質的に明らかにすることを目的とする。

## (2) 方法

### ① 調査協力者

調査 I の調査協力者に対し、インタビュー調査を依頼した。

### ② 倫理的配慮

調査に際して、事前に本研究の主旨と個人情報の保護について、調査の中止を要求する権利等の説明を行い、調査協力者から同意を得た。また、創価大学の人を対象とする研究倫理委員会の承認を得た。

### ③ 手続き

特別支援学校高等部卒業後約1年が経過した2021年3月末に母親に対して70分程度の半構造化面接を実施した。面接の際には調査協力者の了承を得た上で録音を行った。後に録音データをもとに逐語記録を作成し、SCAT (大谷, 2019) による質的分析を行った。分析テーマは『ASD児の母親における子どもの社会的自立に向けての体験プロセス』とした。面接における質問項目は次のとおりである、

i. お子様の社会的自立および就労について意識し始めたのは(小中高)いつ頃ですか。何かきっかけはありましたか。ii. 社会的自立および就労を意識し始めたことで良かったこと、その他の気持ちはどのようなものがありましたか。iii. お子様ご本人の社会的自立および就労に対する意識はいつ頃から見られましたか。何かきっかけはありましたか。意識し始めたことでお子様の行動や言動に変化は見られましたか? iv. 学校における就労支援の流れを教えてください。(授業や実習の流れ等) v. 事業所の種別(就労継続支援A型・B型、就労移行支援)を決めたのはいつ頃ですか。vi. 事業所選びでは何を重視しましたか。現在の事業所を選んだ理由は何ですか。vii. お子様が現在の事業所に行き始めたころのお気持ちを教えてください。当時のお子様の様子を教えてください。viii. 約1年経った現在のお気持ちを教えてください。また、現在のお子様の様子を教えてください。ix. 今後の見通しはどのようになっていますか。

以上を軸とし、必要に応じて話の流れに沿った質問を随時追加して行った。

SCAT (Steps for Coding Theorization) は、大谷(2007)により開発された質的データ分析手法である。言語データを分析し理論を作成する手続きが明示的であり、比較的小規模のデータにも適用することができるという特徴を有する(大谷, 2019)ことから本研究の分析手法として適していると考えた。

SCATについては大谷(2007)を参考に以下に説明を加える。

SCAT (Steps for Coding and Theorization) とは大谷によって開発された質的分析方法である。

〔コーディングの手順〕<1>データの中の注目すべき語句を記入する。<2>前項の語句を言い換えるデータ外の語句を記入する。<3>前項を説明するための概念、語句、文字列を記入する。<4>テーマ・構成概念(コード)を記入する。



このように4つのステップからなり、このステップを踏むことで面接記録のデータの抽象度を高めながら、コーディングを行っていく。そして、最終的にはストーリー・ラインの作成および理論記述を行っていく。

### (3) 結果

SCATによる分析手続きにおけるテキスト、〈1〉～〈4〉のコーディング、ストーリー・ラインおよび理論記述を表2に示す。表中では各セグメントに番号を付し、調査協力者については発話者Aとして記載する。なお、個人が特定される可能性を考慮し、分析手続きに影響のない範囲でテキストの一部を省略した。





#### (4) 考察

本研究では、特別支援学校に通うASD児の母親が子の社会的自立に向けてどのような体験プロセスを辿るかについての分析を行った。以下、SCATにおける理論記述を基に考察を行う。母親の具体的な発話については「斜体文字」で記述する。

##### ① 就労イメージの具体化及び母親としての当事者意識の芽生え

・ASD児の特別支援学校中学部在学中、母親は子の社会的自立についてリアルな情報の入手をきっかけに進路選択の具体的様相の実感を持つとともに、就労イメージの具体化を行う。

・母親が子の自立および就労を意識し始めることで、子についての将来のビジョンの意識化が図られ、長期的展望やASD児を持つ保護者としての当事者意識を持つことにつながる。

まず初めに、社会的自立を意識するきっかけは、学校でリアルな情報を得たことで「あ、卒業後こういう施設に行くんだ」と思ったことであることが語られた。そして、就労イメージが具体化されることで子の社会的自立に向けて、母親自身がこれからどのように行動を起こしていけばよいか見通しを持つことにつながっていた。障害を持つ子の就労は一般的な就職活動とは異なる部分も多く、子の就労イメージが漠然としていることが想定されるため、具体的にイメージすることが出来るような情報の提供が重要であることがうかがえる。現在、障害者総合支援法によって定められている障害福祉サービスにおける就労支援としては「就労移行支援」「就労継続支援」「就労定着支援」があり、それぞれ特徴や対象が異なるため、ASD児・者本人と学校、家庭、事業所等が連携して最も適した制度を選び、利用していく必要がある。このことから、母親および父親といった主な養育者が早い段階で子の社会的自立に向けての意識を持ち、子の特性をアセスメントしながら就労に関する制度等の情報を収集していくことが、より良い就労支援につながっていくと考えられる。したがって、小学校（特別支援学校における小学部）および中学校（同、中等部）の時期から保護者が情報収集を着実に行っていくことで高等部における具体的な進路に関する動きもスムーズに行うことができると推察される。また、ASD児本人に対する支援としても、平成29年に特別支援学校小学部・中学部学習指導要領が、平成31年に高等部学習指導要領が改訂され、その改訂の基本方針に“自立と社会参加に向けた教育の充実”として、「卒業までに育成を目指す資質・能力を育む観点からカリキュラム・マネジメントを計画的・組織的に行うこと」および「幼稚部、小学部、中学部段階からキャリア教育の充実を図ること」（文部科学省，2019，p.9）等が規定されている。

##### ② 母が子の就労を当事者として意識するために必要な環境

・母親が子の就労を意識するには母親自身のゆとり感の他に子どもの環境への慣れが必要になる。

・手厚く保護されている学校から社会に出るにあたっては、子に対する薄い守りへの

危惧を持つ。

・学校において母親は保護者同士の情報共有の中で実感を伴った情報を入手し、インフォーマルネットワークの形成の機会を得ている。

これらからは、特別支援学校という環境が母親に与える影響が見受けられる。石塚(2016)は、特別な教育的ニーズのある児童の保護者を対象に子どもの学校教育におけるニーズを調査した中で、通常学級に在籍するLD/ADHDおよびASD、知的障害等の特別な配慮を必要とする児童の保護者よりも、特別支援学級・学校に在籍する児童の母親の方が「学習面」また「学習面以外」の満足感が高いということが示唆されている。本事例においても、「支援学校だったから余裕ができたのかも」という語りがあるように、特別支援学校の教育に対する満足感や信頼感が、子の進路について考えていくための母親の心理的なゆとりにつながったと考えられる。しかしながら、一方で、学校における手厚い支援は“卒業後にサポートが少なくなる不安”を呼び起こす可能性も示唆された。宮地ら(2009)は、高等部等を卒業した後の青年期および成人期においては、“就労支援”と“地域における生活支援”が家族にとっての大きなニーズであることを報告している。卒業後、ASD児・者やその養育者は主に発達障害者支援センター等の関係機関及び民間の団体からのサポートを自ら得ていく必要があるため、そのような相談機関の情報提供を在学中から行い、卒業後の支援につなげていくことが大切になる。また、特別支援学校では保護者同士の情報共有が、子の進路を決定していく上で重要な役割を果たしている。川田・岡田・片山・野嶋(2017)は成人期ASD者の家族の支援ニーズについてのインタビュー調査を行い、家族が考える必要な支援として「先の見通しがもてる支援」(p.143)を抽出している。先輩保護者の実体験を基にした就労に関する情報を得ることで、子の具体的な就労イメージにつながり、先の見通しを持つことができると考えられる。小山・内海(2008)によると、保護者間の情報伝達には、「経験したことから得られた情報は实际的、具体的で説得力もあることから、後輩保護者が将来的な見通しをもつためには、大きな影響を与える」(p.100)要素と、「情報を受け取る保護者は、情報の内容を得るとともに、情報の得る方法についても学ぶことができ、情報活用能力が高まる機会となり得る」(p.100)要素があるとされるが、これらは本研究で得られた知見とも一致している。

### ③ 就労に向けての具体的なステップ

・就労に向けて母親はまず本人の就労選択のための下準備を行い、その中で就労を定着させるためにレディネス形成のスマールステップの必要性を認識する。

・子の負担の少ない就労に向けて次のステップへの段差を小さくするために、移行段階のスロープ化を意図し、子と就労先の適切なマッチングを目的として、本人の状況に合わせた既存制度のカスタマイズを試み、社会的自立までの移行期間の捻出を行う。

・進路決定にあたっては、子の特性把握や子のアセスメントを基に、先行事例の活用

を行い、子の心的負担の軽減も考慮している。

・具体的な事業所選びにおいても子の特性と物理的条件・職場風土・行動様式との適合性を基に母親が伴走者として道案内を行いつつ親の思いと本人の実体験に基づく感觸の摺り合わせを重ねた上で、決定に際しては子の最終決定権を重視している。

・キャリアプランの検討を行う中で、現在の事業所に対しては作業時間・内容の拡充など先を見据えた期待を抱くようになり、今後の事業所選択においては必要条件としての継続・定着支援が重要であることを認識している。

以上において、子の社会的自立・就労における母親の行動プロセスが明らかになった。母親は子の就労について意識し始めたころから、少しずつ子の職業準備性の形成を図るために行動している。職業準備性とは「個人の側に職業生活を始める（再開も含む）ために必要な条件が用意されている状態」（高齢・障害・求職者雇用支援機構, 2021, p.27）とされており、具体的には、①職務遂行に必要な技能、②職業生活を維持するために必要な態度や基本的労働習慣（仕事に対する意欲、一定時間労働に耐える体力、規則の遵守、責任感、称賛および批判を受け入れる態度等）、③職業生活を支える日常生活・社会生活面の能力（健康管理、生活リズムの確立、日常生活の管理、対人技能、移動能力、消費者としての技能、社会資源を活用する技能等）といった幅広い内容が含まれる。梅永（2017）では、「発達障害者の就労の問題が仕事そのものの能力であるハードスキルよりは日常生活や余暇などのソフトスキルの問題がはるかに大きいということは、ソフトスキルのベースとなっている日常生活で必要とされるスキル、いわゆるライフスキルの支援が必要」（p.67）であると述べられている。また、上岡（1997）では、自閉症者の就労に関する研究を行っており、「就労している者の親のほとんどが基本的な生活習慣と家事労働に力を入れて指導していた」（p.35）と報告している。家庭において日常生活・社会生活の能力などのソフトスキルの向上を図ることで職業準備性を高めることにつながる。そして、本事例において母親は子の職業準備性の形成を図りながら、実際の就労のために子の特性と事業所とのマッチングを行い、最終的には本人の意思を尊重した進路選択を行っている。梅永（2017）はASD者の職場定着において必要なこととして、“適切なジョブマッチング”を挙げ、実際の現場での職業体験等を基にしたアセスメントの重要性について論じている。本事例においても、「あ、こういうこともできるんだな」とあるように母親は子の実習での様子や変化について事業所選びの際の検討材料として活用しながら、「就労移行からはちょっと難しいかなって思って」など事業所と子の特性との適合性を慎重に見極めていることがうかがえる。また、進路選択にあたって母親は就労の継続・定着を視野に、「ゆっくりさせたかった」「気持ちの方がまずついていけないだろうって」「遠すぎると行くだけで疲れてしまう」等と語られているように、出来得る限り子の心理的・身体的負担が軽減できるように就労前後のギャップを小さくすることを重要視していることが示された。

また、事業所に通う中で母親が今後のキャリアプランの検討を行っており、現在の事業所に対してはステップアップの希望を抱き、今後の事業所選びでは就労の継続・定着支援の充実を重視していることが示された。このことから、今後のキャリアプランの検討においてもスモールステップを試みていることが確認された。

#### ④ 子の成長への気づき

・子の在学中には子自身の就労者としての自覚や意識の高まり、自己選択能力の習得、職業準備性の芽生えに母親が気づき、成長の実感を持つ。

・高等部卒業後には子の感情のコントロールや意外な順応性、成長の兆しに母親が気づき、子と事業所との適合への安堵感を得る。

高等部では1年生から校内実習が始まり、2・3年生においては現場実習も行われる。校内実習においては実習を見学する機会もあるため、保護者が子の適性や職業準備性等を実際に目で見て確認することが出来る。本事例においても、「**工作中だからみたいな顔して**」と語られているように、普段家庭では見ることのできない子の就労への意欲や、就労に向けての能力を発見し、新たな一面や変化・成長に驚いていることが分かる。

宇津ら（2019）では、自閉症児の母親の長期的心理過程に関するインタビュー調査を実施し、4ケースの比較検討を行っている。それらのケースでは子の卒業後の作業所における安定した状態が母親の“不安”を軽減し、“安堵”をもたらしていることを示している。本事例においても、高等部を卒業し就労継続支援B型事業所に通い始めてから子の順応性や成長を目の当たりにし、「**合ってたのかな、良かったな**」というように事業所との適合に安堵している心情が語られている。このことから、高等部在学中の事業所見学や実習期間だけでは子に合っているかどうかの判断は難しく、実際に通所して初めてそれらを確認することができ、適合していた場合は“安堵”につながるということが示された。

#### ⑤ 子の社会的自立に向けた母親の基本的態度

・母親の子への関わりとしては静観の態度を基本に子の気持ちの揺れの保障を心掛け、時には子への信頼に基づいた困難場面への押し出しを行っている。

・母親は子の社会的自立に向けて、ほどほどの躓きを子に経験させることや、その中でさり気ない支援を行うことが必要であると考えている。

・子に就労の実感を持たせることを重視し、それを基に自己管理能力の育成を図っている。

これらは、子の社会的自立に向けた母親の基本的な態度についての記述である。本事例では、「**特に何も言わず**」とあるように、子の気持ちの揺らぎに気付いた場合でも基本的には見守りの姿勢を保っていた。また、“ほどほどの躓き”は「**そういう経験もいるから**」と子の成長にとって必要であると考えており、時には困難な場面へと押し出すことも行っていた。

また、高等部在学中から卒業後に渡って一貫して行っているのが“働くという意識”を持たせることである。さらに、「意欲を高めてくれそうなどころに行けるよう」と語られているように、卒業後に通う事業所についても子の就労意欲の向上に対する支援を期待していることがうかがえる。

#### 4 おわりに

##### (1) 調査Ⅰ・Ⅱを通して

調査ⅠではASD児の母親の連絡帳における記述の分析を通して特別支援学校高等部在学中の子の社会的自立に関する流れを概観し、調査Ⅱでは中等部入学から高等部卒業後1年間（合計7年間）についてのインタビュー調査を通してASD児の母親における子どもの社会的自立に向けての体験プロセスを明らかにした。

連絡帳分析から母親は高等部1年生時には進路に関してのイメージを持ち、子への意識づけを行っていく“動き出す”段階、2年生時には具体的に事業所の種類を決めていくなど進路についての考えを“深める”段階、3年生時には1・2年生時に積み上げてきたことをもとに実際に進路の決定を行う“実行する”段階を踏むことが示された。小山・内海（2008）は、特別支援学校進路指導における保護者のニーズ形成について検討を行い、保護者の“将来の生活や進路に対する関心や見通しとして”高等部1年では「卒業後の生活への具体的意識化」、高等部2年では「進路選択の具体化」、高等部3年では「進路先選択・生活設計の具体化」を挙げており、本研究によって示された母親の体験プロセスも、それらと概ね一致していることが確認された。そして、本研究のインタビュー調査からは、母親が子の社会的自立に向けて“スモールステップ”を重視していることが明らかになった。中学部での経験が高等部で“動き出す”段階の準備になっており、それがスモールステップという具体的な形で意識化されたと考えられる。以上のように、本事例におけるASD児の母親は、高等部入学当初から子の社会的自立に向けて職業準備性等をスモールステップで身に付けさせることを重視すると同時に、母親自身も子の社会的自立に向けてスモールステップで行動を起こしていることが確認された。

また、このような母親の“子の社会的自立”に向けての意識の醸成には、前項でも述べたように、特別支援学校という環境が大きく寄与していると推察される。

そして、連絡帳分析において〈事業所〉〈見学〉という語句が高等部3年間を通じて強い共起関係を示していることが確認された。これは、インタビュー調査で明らかになったように、母親が子の社会的自立に関して重視している“実際に目で見て具体的にイメージできる情報”や“「働く」という意識を子に持たせる”という事柄が“事業所を見学する”という行動と合致するためであることがうかがえる。ここでも、母親自身の具体的な情報の入手と、子への「働く」という意識づけという行動が同時に



行われていることが示された。小山・内海（2008）では、高等部段階のニーズ形成について「現場実習先で、作業をする自分の子どもの姿を見て、卒業後に必要な要素を考えるきっかけになった」（p.99）という保護者の語りとともに、保護者が実習に付き添った体験を通して「自分の子どもに合った生活スタイルや作業内容のイメージをもつことができた」（p.99）ことを報告している。また、梅永（2017）では、ASD者の職場定着に必要なこととして、「実際の現場でのアセスメント」（p.64）を挙げており、さらには、職場体験学習やインターンシップ等について「発達障害児童生徒にとっては、実際の現場で直面する課題が明確になるから、この職業体験は極めて有益である」（p.67）と述べている。このように、“現場を体験する”ことは、進路選択を行っていく過程において親子双方にとって重要な意味を持つと考えられ、本研究で得られた結果は先行研究の知見を裏付けるものとなった。

以上のことから、子の社会的自立に向けて母親は子に対するサポートを行うと同時に、母親自身も子の社会的自立のための準備を行っており、母と子が一歩ずつ共に成長していく過程を辿ることが示唆された。

## （2）本研究における今後の課題

本研究はASD児の母親における一事例の探索的研究であり、一般化はできない。今後はさらに多くの事例を集め、比較・検討を行っていく必要がある。また、本事例は特別支援学校という環境のもと、就労に関する支援が比較的良い結果に結びついた事例であることから、ASD児の社会的自立・就労における困難性や課題についての言及はあまりなされていない。したがって、就労支援に困難をきたした事例や、就労後に離職に至った事例等についても調査が必要である。そして、本研究では母親の視点から調査を行ったが、今後は母親以外の家族の視点や、学校や支援機関との連携という観点からも検討していく必要がある。

## 引用・参考文献

阿部美穂子・佐々木由奈・松田麻美（2018）. 小学校特別支援学級で使用する連絡帳における子育て支援機能の事例的検討. 北海道教育大学紀要（教育科学編），69（1），93-107.

中央教育審議会（2011）. 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）.

[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf)（2021年10月31日取得）

樋口耕一（2020）. 社会的調査のための計量的テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して 第2版. ナカニシヤ出版.

- 石塚誠之 (2016). 学校教育において特別な配慮を要する児童に対する支援の実態と課題:保護者のニーズに関する調査研究から. 北翔大学教育文化学部研究紀要, 1, 1-14.
- 神田英治・伊藤政勝・高橋徳樹 (2018). 自閉症スペクトラム障害 (ASD) のある人の就労支援に関する研究:特に知的障害特別支援学校高等部の職業的自立をめざした教育と卒後支援. 北翔大学教育文化学部研究紀要, 3, 55-74.
- 川端奈津子 (2019). 就職した自閉スペクトラム症者が困難に対処しながら働き続ける過程. 自閉症スペクトラム研究, 17 (1), 43-51.
- 川田美和・岡田俊・片山貴文・野嶋佐由美 (2017). 成人期にある高機能自閉症スペクトラム障害者の家族支援のニーズ～インタビュー調査に基づく分析～. 高知女子大学看護学会誌, 43 (1), 140-150.
- 高齢・障害・求職者雇用支援機構 (2021). 令和3年度版 就業支援ハンドブック. <https://www.jeed.go.jp/disability/data/handbook/handbook.html> (2021年8月18日取得)
- 小山高志・内海淳 (2008). 特別支援学校進路指導における保護者のニーズ形成に関する事例的検討. 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 30, 95-102.
- 前田明日香・荒井庸子・井上洋平・張鋭・荒木美智子・荒木穂積・竹内謙彰 (2009). 自閉症スペクトラム児と親の支援に関する調査研究. 立命館人間科学研究, 19, 29-41.
- 松山郁夫 (2015). 自閉症児者を有する家族における社会的支援に関するニーズ. 佐賀大学教育学部研究論文集, 19 (2), 263-268.
- 宮地由紀子・増田樹郎 (2009). 発達障がい児の家族に対する地域支援—発達障害者支援センターの調査から—. 障害者教育・福祉学研究, 5, 41-50.
- 文部科学省 (2019). 特別支援学校学習指導要領解説:知的障害者教科等編 (上) (高等部). [https://www.mext.go.jp/content/20200325-mxt\\_tokubetu01-1386427\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200325-mxt_tokubetu01-1386427_4.pdf) (2021年8月18日取得)
- 永吉美砂子 (2017). 発達障害者の就労支援. リハビリテーション医学, 54, 279-282.
- 内閣府 (2021). 令和3年度版障害者白書. <https://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/r03hakusho/zenbun/index-pdf.html> (2021年10月31日取得)
- 西村智恵子・高野久美子 (2020). 学童期自閉症スペクトラム児の母親における困難への対処に伴う体験のプロセス. 人間福祉学会誌, 19 (2), 17-24.
- 大谷尚 (2007). 4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCATの提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—. 名古屋大学大学院教

- 育発達科学研究科紀要・教育科学, 54 (2), 27-44.
- 大谷尚 (2019). 質的研究の考え方—研究方法論からSCATによる分析まで. 名古屋大学出版会.
- 清水浩 (2017). 自閉症スペクトラム児への就労支援に関する現状と課題. 山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告, 44, 43-52.
- 愼英弘 (2008). 自立の概念と構造. 四天王寺大学紀要, 46, 85-107.
- 塩見啓一 (2017). 特別支援学校における連絡帳を活用した教育実践報告. 学校臨床心理学研究: 北海道教育大学大学院教育学研究科学校臨床心理学専攻研究紀要, 14, 67-76.
- 上岡一世 (1997). 自閉症者の就労に関する研究—就労事例の検討を通して—. 特殊教育研究, 34 (5), 29-36.
- 梅永雄二 (2017). 発達障害者の就労上の困難と具体的対策. 日本労働研究雑誌, 685, 57-68.
- 宇津貴志・伊藤弥生 (2019). 自閉症の子を成人に育てるまでの母親心理. 人間科学 (九州産業大学人間科学会), 1, 15-26.

#### 謝辞

本論文の執筆にあたり快く研究にご協力くださった調査協力者およびご家族の皆様に、深く御礼申し上げます。

#### 付記

本稿は、2022年に創価大学大学院文学研究科に提出した博士論文の一部を加筆修正したものである。

## **The Process Toward Social Independence of the Child as Experienced by Mothers of Children on the Autism Spectrum.**

**Chieko NISHIMURA Kumiko TAKANO**

With the cooperation of a mother of a child with ASD who was enrolled in the middle and high school of a special needs school, this paper analyzes the communication notes for three years of the ASD child's high school years and interviews the mother about the child's middle and high school years and one year after graduation from the high school. Through this analysis, I investigated how the mother of a child with ASD experiences the process of her child's social independence. The following findings were confirmed in each research.

Analysis of communication notes: In the first year of high school, the mother of a child with ASD began to visit a workplace as the first stage of "experiences related to her child's social independence". In the second year of high school, she decided on the type of business that suited her child, and at the same time, she was making her child aware of the necessity of employment. In the third year, the mother experienced the stage of deciding on a post-graduation course of study and carrying out the necessary procedures.

Interview survey: (1) The mother concretizes the image of employment through the acquisition of realistic information. (2) The mother obtains real information in informal parents networks that she built. (3) The mother attempts to slope the transition phase toward employment with less burden on the child. (4) The mother notices the child's own growing awareness and consciousness as a worker, the child's acquisition of self-selection skills, and the child's budding vocational readiness, and feels a sense of growth. (5) The mother's relationship with her child is based on observing the situation. She then tries to assure the child's feelings. At times, she must trust her child and let him face the difficulties.

Through the above analysis, it was confirmed that the mother of the ASD child in this case focused on having her child acquire employment readiness in small steps toward social independence from the beginning of high school, and at the same time, the mother herself took actions in small steps toward her child's social independence. In addition, the analysis of the liaison book showed that the words "office" and "visit" had a strong co-occurrence throughout the three years of upper secondary school. As revealed in the interview survey, the mother emphasizes the importance of "information that can be seen with the eyes" and

“letting the child have an awareness of working” in order for the child to become socially independent. The above co-occurrence was demonstrated because the above-mentioned behavior was matched with the behavior of “visiting the business office”. Thus, it was confirmed that “experiencing on-site” is important for both parents and children in the process of choosing a career path.

